

第53回 運輸政策セミナー

日本—スイス交流
—スイス大使時代の経験から—

平成29年7月19日 運輸総合研究所 大会議室

1. 講師——前田隆平 全日本空輸株式会社取締役
前在スイス日本国特命全權大使

2. 司会——山内弘隆 運輸総合研究所所長

■講演の概要

1——スイスの概要

スイスの人口は830万人。面積は、日本の九州に東京23区の面積を2つ足すとぴったり同じになる。

小さな国だが、GDPは世界第20位で、一人当たりGDPはルクセンブルグについて世界第2位である。

GDPの70%がサービス業、金融、保険、さらには観光で、それらが中心産業となっている。一方、製造業は、時計などの精密機械、薬品だが、GDPに占める割合は大きいわけではない。

人、モノ、特にお金が集まる仕組みを作って、その付加価値で生きているという意味においては、香港、シンガポールと共通したところがある国といえる。

首都はベルン。人口13万人の小さな街である。中心部には、世界遺産である中世の街並みもあり、そういう意味では、作られた首都ではなくて非常に伝統と歴史のある街である。

交通の要衝でもあり、小さな街にもか

かわらず、駅は非常に大きく、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリアから列車が乗り入れ、乗換客も多い。

2——スイスの特徴

皇太子殿下が、2014年の6月にスイスを御訪問された際、スイスの特徴を大きく3つ、中立性、多様性、独立性、と御説明申し上げたが、今回もその3点について説明する。

2.1 中立性

まず、1つ目の中立性だが、スイスは、1815年のウィーン条約以来永世中立を保っている。

西欧の中心に位置しながらNON EU（EU非加盟）である。あまり知られていないが、国連の加盟も2002年で、加盟してから15年に過ぎない。

一方で、国際機関等は多数誘致しており、ジュネーブにはWTO（世界貿易機関）、ILO（国際労働機関）、WHO（世界保健機関）、WMO（世界気象機関）等多数の国際機関が所在する。首都ベルンにも、UPU（万国郵便連合）が所在する。

国連に加入していなかったにもかかわらず、国際機関は多数誘致しているが、実は、永世中立国だからこういった国際機関等も逆に誘致できていたのではな

いかと考えている。また、対立している国同士の間に入っ

ての仲介等、独自の外交を展開している国である。

というのは、常にスイスの国内でも議論になっている。ただ、国民投票にかかる

と大体、大差で加入が否決されている。EUに加盟した場合、問題を抱えている他の国に足を引っ張られることや、輸出における外国為替面でのメリットもあまりないこと等から、加盟のメリットがあまりないので、NON EUを保っている

とみており、個人的には、スイスは未来永劫EUには加盟しないのではと考えている。ただ一方で、ヨーロッパ諸国の中で、スイスはEUに入るべきだと考えている国もいくつかある。在スイスのポーランド大使からは、「EUの加盟、非加盟の議論をする際にも経済面のことばかり問題にするが、EU加盟というのは安全保障その他、政治的な面でも非常に大きな意味があるのだ」との意見も聞いた。

2.2 多様性

次は2番目の多様性。多様性の国といわれる国がたくさんある中、スイスも間違いなく多様性の国である。

まず言語が多様で、公用語が、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の4言語である。国土の面積でいうと、ドイツ語圏が64.1%、フランス語圏が20.4%、イタリア語圏が6.5%、ロマンシュ語圏は0.5%、英語等その他が8.5%である（図—1）。

その中で、日本人にとって非常に興味深いのは、国の中で言葉が突然変わる

ことである。例えば、ベルンからローザンヌの間の



講師：前田隆平



【言語区分図】

■ドイツ語(64.1%) ■フランス語(20.4%) ■イタリア語(6.5%) ■ロマンシュ語(0.5%)
その他の言語(8.5%)

出典：スイス政府観光局

■図一1 スイスの言語圏

フリブールという街が、フランス語圏とドイツ語圏との境界に位置するが、山があるわけでも川があるわけでも州境があるわけでもないのに、突然言語が変わる。高速道路を走っている際に、「出口」の表記が「AUSFAHRT」から「SORTIE」に変わるのは、単一言語の日本人にとっては本当に興味深い現象に感じる。

ただ、これもスイスの人たちはよく、「これは言語の違いであると同時に、メンタリティーの違いだ。」ともいっている。確かに言葉が違うことによってメンタリティーも変わってきて、地域ごとで文化的にも変化があると思う。

例えば、ベルン周辺はドイツ語圏なので、文化的にもドイツに近いと思う一方で、ドイツ語圏から南のティチーノ州のルガーノという非常にきれいな街などイタリア語圏に来ると、ファッションも突然あか抜けてくる。レストランの食事なども非常においしくなり、運転は荒っぽくなる。

また一方で、スイスはジュネーブのような国際都市も所在している。スイスのたくさんの人が、「あれはスイスではありません。」などとよくいうが、確かに他の街とはちょっと雰囲気違って、洗練されたきれいな街ではある。

なお、「ジュネーブはスイスではありません。」というのは、スイスに超一級の国

際都市が所在していることを、スイスの人たちが自慢しているのだと捉えている。

改めて、ファッションの話をする、ベルンなどドイツ語圏スイスでは、ファッションナブルとはいいいがたいのに対して、フランス語圏に行くとき改善されるし、イタリア語圏に行くときさらにあか抜けてくる。

ベルンから南へ3時間車で走らせるとイタリアのミラノに行けるが、ファッションについては、差が大きい。

それから食べ物についても、チーズフォンデュ、同じチーズ料理のラクレット、チューリッヒケシニッケル(ビーフシチューの類)、各種ソーセージのドイツ語圏スイスと、パスタその他もおいしいイタリア語圏など差が大きく、そういう意味ではまさに地域によっていろいろなものが異なる、多様性の国ということがいえると思う。

2.3 独立性

次が3番目の独立性だが、スイス人、スイスという国の独立性を象徴するのが、直接民主制や国民投票である。このスイスの国民投票で、国会の議決も、割と頻繁にひっくり返る。

例えば、イギリスのEU脱退問題では移民が大きな問題だったが、移民についてはスイスでも問題になっている。

スイスの場合はNON EUだが、バイ

(スイス・EU間)の協定で様々なことをEUと取り決めており、EU非加盟でありながらEUに加盟しているのと同等の恩恵は、多大に受けているというのが現実である。

移民も同様で、EUとの間では移民の自由というのがバイで合意されている。

ところが、2014年2月、スイスに入ってくる移民の上限を決めることが、条約違反にもかかわらず国民投票で可決された。国民投票の結果は尊重しなければならないが、その一方で、EUとの関係では条約に反することから、妥協案が必要とされている。ただし、条約が移民の自由を決めている以上、どうやっても条約違反になってしまう状況にある。この問題は、まだ結論は出ていないが、相当もめている。

このように、国会の議決はもとより、条約まで国民投票でひっくり返してしまうというところが、スイスの非常に大きな特徴である。

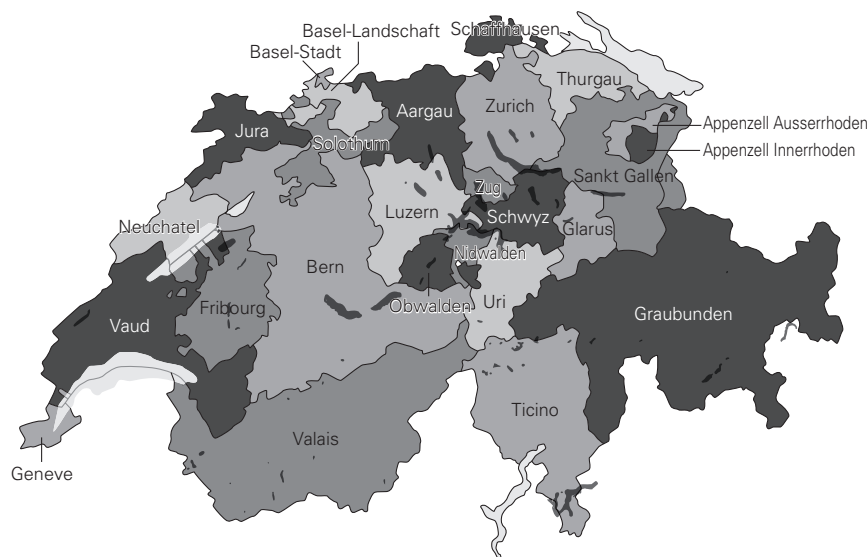
それから、この国の独立性ということと不可分であるが、地方自治体の独立性が非常に高いというのが特徴である。

もともと、スイスは、1291年、ウリ、シュビーツ、ウンターバルテン(現在は、ニトバルテン及びオプバルテン)の3つの州が当時ハプスブルグ家に対抗するために盟約を結んだことに始まる。

ベルン州、チューリッヒ州等の割と大きな州が参加したのが、建国から50年後、バーゼルが加盟したのが200年後、現在の連邦国家が確立されるまでに、1291年から大体500年を要している(図一2)。

こういった国の成り立ちからして当然かもしれないが、中央集権的な要素はきわめて希薄で、外交、防衛、通貨、関税、この4つを除いて、実質的には州などの自治体が、権限を有している。

連邦政府には、それぞれ担当省庁が決まっている7人の閣僚がおり、この7人の合議体が元首の役割を果たしている。



出典：旅行のとも、ZenTechの図を基に作成

■図—2 スイスの州区分

大統領は1人この中から選ばれ、今はロイタードさんという女性が大統領である。ただ、これは回り持ちで、任期は1年。1月1日から12月31日で大統領の任期は終わり、大統領就任の順番も、閣僚になった順番と決まっている。また、7人の閣僚は、4つの政党に所属しており、これも非常にスイスらしいと思う反面、日本人にはわかりにくいとも思っている。そのほか、閣僚を出している4政党以外では、緑の党などはあるが、必ずしも対立政党ではないことや、行政の総覧者としての首相がいらないこと等、非常に日本人にはわかりにくい政治の仕組みだと感じる。

3——日本・スイス経済連携協定

こういった中立性、多様性、独立性の国スイスに私は2013年の2月に赴任したが、この時点で日本とスイスの関係は、昔からと同様、極めて良好だった。

2009年に既にスイスとの間には経済連携協定（EPA）が結ばれ、2009年以降も租税条約、社会保障協定等の条約が成立しており、私の赴任時には経済案件は片付いた状態で、私の役目は、まさにその友好的な関係を、さらに増進していくということにあった。

EPAについていえば、EUとの間では、最近大幅に前進したものの未締結であ

る。ここで、日本・スイス間、日本・EU間を比較する観点から、日本とEUのEPAについて若干の話をします。

日本とEUとのEPAの交渉は、先般、基本的合意にはなったものの、本当に長い道のりだった。交渉が難航した理由は、対立点が多かったこともあるが、やはりEUが国でないことも大きな理由であったのではないと思う。

私も国土交通省にいた時に、航空協議等のバイの交渉をいくつか経験したが、バイの交渉の場合には、相手国の交渉担当官がもちろんその国の利益や利害を代表しているので、なぜそういう主張をするのかが非常にわかりやすいと思う。

例えば米国との自動車協議において、米国側が強硬な主張をしても、これは自動車メーカーの意向だとわかるので、妥協点を探ることもでき、交渉の目途も非常に立てやすい。しかし、EUは国ではないので、この部分がわかりにくい。

私は、日本とEUとのEPAの交渉では、鉄道のJRの政府調達を担当した。その際のEU側の主張は、完全民営化されているJRの調達を政府調達協定に基づいて一般競争入札にかけろべきだという不当なものだったが、そのような主張をする理由が理解しがたく、交渉が困難

だった。

一方、日本とスイスとのEPAの交渉の場合だが、スイスはもちろん国であり、その主張は明確であることに加えて、日本とスイスとの間にはあまり経済面で深刻な問題がなかった。例えば農業は、日本、スイスともにプロテクティブであり、また自動車についてはスイスでは製造していない。このように、いろいろな面で障壁がなかったことから、準備段階はあったものの、交渉開始が2009年1月で2009年2月には署名に至り、非常に交渉は円滑だった。

しかし一方で、両国間に経済上の問題がないので、締結後の効果が薄かったのも事実である。締結された2009年から2012年までの間、両国間の貿易の増加額はほぼ0であった。そのため、EPAの効果に懐疑的な意見もあったが、私はこれを、もともと対立がないから、EPAを結んでも目に見えた効果がないのであって、日本とスイスとの関係が良好である証拠だと説明してきた。

4——日本・スイス国交樹立150周年

私の任期中の2014年に日本とスイスの国交樹立150周年を迎えることになった（図—3）。1864年に日本とスイスとの間で友好通商条約が結ばれて国交が樹立された。これは明治維新より前である。

スイスは、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、オランダ、ポルトガル、プロイセンに次いで、日本と国交を樹立した8番目の国である。今申し上げたスイスより前の7か国は海に面しているが、そういう中で山に囲まれたヨーロッパの小国スイスが8番目に国交樹立をしたということは、いかに日本に興味を持っていたか



出典：在スイス日本国大使館HP

■図—3 国交樹立150周年公式記念ロゴ

ということだと思う。

4.1 記念イベント

国交樹立150周年に、以下に示すものを初めとして、240件を超える記念イベントが開催された。

(1) 音楽コンサート

- ・ピアニストの辻井伸行氏 (5月)
- ・尺八奏者の中村明一氏 (7月)
- ・バイオリニストの五嶋龍氏 (8月)
- ・雅楽師の東儀秀樹氏他 (10月)
- ・モントルー・ジャズフェスティバルJAPAN DAY

ピアニスト上原ひろみ氏、ギタリスト布袋寅泰氏、尺八奏者の中村明一氏が出演。

(2) ジュネーブ・ブックフェアへの出展 (4月～5月)

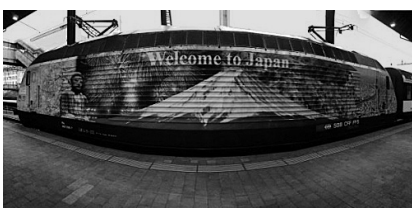
日本ブースを設け、作家講演会、茶道の行事、日本酒、日本食の紹介、日本語のワークショップ、観光プロモーション等幅広いイベントを開催し、6万9千人の訪問者を数えた。

(3) 日本の伝統に関する公演等

能楽 (2月～3月)、着物のショー (7月)、文楽 (9月～10月) 等の公演をスイスの各都市で開催。



■写真1 ライティングイベント



■写真2 ラッピング車両

(4) 石井幹子氏及び石井リーサ明理氏による光イベント (9月)

連邦議会広場前でのライティングイベントを開催 (写真1)。

(5) 訪日観光促進

- ・ザンクトガレンの旅行博 (2月) に参加。
- ・日本の観光名所をラッピングした機関車が、1年間スイス国内を走行 (写真2)。

(6) 草の根交流

JAPANウィーク (10月・ベルン) に、日本より市民交流団体61団体約1,300人強 (ベルン市人口の1%相当) が参加。期間中1万4千人が展示・パフォーマンスを観覧 (写真3)。

(7) その他

記念切手、イヤブックスの発行のほか、2014年2月に日本スイス間のオープンスカイ協定を発効し、記念フライトを運航 (写真4、写真5)。



■写真3 JAPANウィークでのパフォーマンス



■写真4 記念切手

4.2 スイス大統領の訪日

日本とスイスの国交樹立150周年に当たる2014年2月に、ブルカルテール・スイス大統領が訪日し、天皇皇后両陛下、皇太子殿下と御会見、安倍総理と首脳会談、岸田外相との外相会談のほか、キックオフイベントに出席された。

また、鎌倉を訪問されたが、早咲きの梅や相模湾の美しさに感銘を受けたと聞いた。

4.3 皇太子殿下御訪問

2014年6月、皇太子殿下がスイスを御訪問された。

その際、御到着のチューリッヒ国際空港から6日間にわたって御案内申し上げ、御公務のほか、皇太子殿下にスイスの美しい山々や湖を御覧頂くことや、スイス料理を楽しんで頂くことなども含めて、心を配った。このことは、大使としての3年間で最高の思い出になった。

4.4 姉妹関係等の構築

以上のように、国交樹立150周年に当たって様々な行事やイベントが開催されたが、それらの最大の目的は、日本というものを知ってもらって、スイスの人に日本に行くインセンティブを持ってもらうということと考えたところだ。

これは着実に効果があり、訪日のスイス人は、2013年が2万8千人、2014年が3万3千人、2015年が4万人、2016年が4万4千人と着実に増加した。

また、150周年というのを単発の打ち上げ花火にはいけないと考え、姉妹



■写真5 オープンスカイ協定記念フライト

関係等の構築を進めた。

以前から、姉妹都市が17組、姉妹鉄道が3組、姉妹郵便局、姉妹植物園、姉妹マラソンコースがそれぞれ1組成立していた。

そこで、これらに加えて、姉妹マリナーとして、葉山のマリナーとレマン湖のモントルーマリナーとの姉妹関係を結んだ。

また、それぞれ歴史的な世界遺産を有する奈良県とベルン州とで、姉妹提携を実施した。

そのほか、姉妹関係ではないが、日本スイスの友好議員連盟を設立して頂いた。なお、スイスの議会は二院制で、上院が46人、下院が200人で組織される。会期は、春夏秋冬の3週間、全部で3か月間である。議員は職業政治家が少ないのが特徴である。

以上のような、姉妹関係等のパートナーシップを活かした友好関係のさらなる発展が期待される場所である。

5——大使生活の総括

私は3年間スイスと日本の友好関係増進に取り組み、その過程で、外交とはどういったものなのかを私なりに学べたと思っている。

2015年9月にグリンデルヴァルトと姉妹都市である長野県松本市の中学生40人がスイスを訪問し、大使館にも表敬に来た。その際に「外交とは何でしょうか?」との質問を受けたが、このように答えた。

「外交とは日本と相手国との良好な関係を作り上げ、それを発展させていくこと。これこそが、真の外交です。以前ワシントンの大使館に勤務していた頃は、優秀な外交官というのは、もめ事を上手に解決する人だと思っていました。しかし、スイスに来て日本とスイスの友好関係を見て、それを増進すべく努力した結果、外交においてもっとも大切なことは、もめ事を解消することではなくて、もめ事が起こらないような素晴らしい関係を

作り上げること、そして、その素晴らしい関係を発展させること、これこそが外交であるということがわかりました。私もこのような大きな発見ができて、また本当の外交というのをしっかり勉強できたと思ってとても幸せでした。」

もう1つ「僕は外交官になりたいと思います。どうすれば良い外交官になれるでしょうか?」との質問を受けたが、このように答えた。

「良い外交官になりたいと思ったら、常に一生懸命勉強する人となることです。あなたがもし、どこかの大使館に勤めたら、その国のことを勉強する必要があります。その国のことを勉強しなければその国を理解できないし好きになれません。また、あなたは同時に日本のことも勉強しなければなりません。そうしなければ日本のことをその国の人に教えてあげられないし、その国の人に日本を好きになってもらえないからです。相手の国のことを勉強し、日本のことを勉強して初めて日本とその国が仲良くできることに貢献できると思います。スイスに来てから私は一生懸命スイスのことを勉強しました。それは私を幸せにしてくれまし

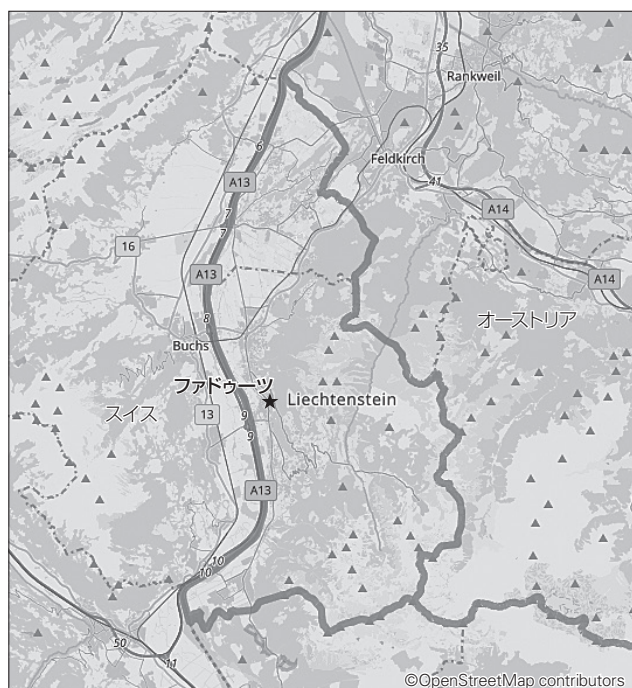
た。なぜなら、スイスのことを学べば学ぶほど、スイスが素晴らしい国だということがわかったからです。また、学べば学ぶほどスイスという国を愛することができました。」

この2つの中学生の素朴な疑問に対する私の答えが、私の3年間の大使生活の1つの総括だったと思っている。

6——リヒテンシュタインについて

スイスの大使とリヒテンシュタインの大使を兼ねていたので、兼轄国であるリヒテンシュタインについて簡単に説明する。

リヒテンシュタインは、これスイスとオーストリアの間にある小さな国で、面積は小豆島程度である。人口は3万7千人。一人当たりGDPはスイスより上で、大体日本の3倍くらいである。スイス同様、金融が中心だが、そのほかに歯科機材の製造や、切手の収入がある。税金対策のために名目的に所在地を置く外国企業の数もたくさんあり、一説には登録会社数が人口よりも多いのではないかともしわれている。当然ながら法人税を中心とする税収も豊富で、一般国民は所得



出典：OpenStreetMapを基に作成

■図—4 リヒテンシュタイン

税も免除されている。首都は、ファドゥーツである（図—4）。この首都ファドゥーツに元首のいるリヒテンシュタイン城があるが、この城はルパン三世のカリオストロの城のモデルとなった城である。

リヒテンシュタインは、国会議員が25人、4つの政党から選出されている。閣僚は5人いる。外務省職員27人、そのうち在外11人、外務本省は16人で、外務省に限らず、全ての役所が1つの建物に入っており、なんとなく政府全体が村役場のような感じである。非常にこじんまりした国だが、財政も豊か、人々の暮らしも本当に豊かで、非常に親日的な、美しいヨーロッパの小国である。

■質疑応答

Q スイスの直接民主主義と議会との

関係について、何が直接民主主義で決めて、何を議会で決めるのか、その辺のルールはどうなっているのか、御教示頂きたい。

A 法律その他の決議は、国会で議決するが、10万人の署名が集まった場合には、国民投票にかけられることとなる。そして、その結果は国会の議決に優先することとされている。

Q スイスは永世中立国だが、どうしたら永世中立国になれるのか。

A ウィーン会議で、永世中立を宣言して、それを周辺国が認めるという形で、永世中立が成り立っている。

Q スイスの閣僚7名は、どのように選ばれるのか。大統領になる順番はどのように決まっているのか。

A 7人の閣僚は、4年に一回の上院選挙の後、連邦議会で選出される。再選さ

れることがほとんどだが、交代する際には、前任の所属政党から候補者が出され選出されるのが一般的である。また、政党の連立によって多数派を形成し7人の閣僚を独占するようなことはやらない。大統領になる順番は、閣僚に就任した順である。大統領に拒否権等の権限は何もないので、そういう意味では大統領になるということの重要性は、そんなにないと考えられる。先程申し上げた7人の閣僚の集合体が元首としての役割を担って、形式的に、信任状の捧呈等はその時の大統領が対応するという感じである。

（とりまとめ：林田拓人、五十嵐達哉）